
オープニングセッション

●—司会（山本一巳） おはようございます。ただいまより2007年度愛知大学国際中国学研究センター国際シンポジウム「現代中国学の新しいパラダイムをめぐって」を開催いたします。はじめに主催者を代表しまして愛知大学中国学研究センター所長の加々美光行よりご挨拶を申し上げます。

開会挨拶

加々美光行

〈愛知大学国際中国学研究センター所長〉

おはようございます。愛知大学国際中国学研究センターは2002年10月に設立され、現在、5年8カ月が経過しました。この間、いろいろなことがありました。5年を経過して、文部科学省の「21世紀COEプログラム」としての事業をここで一度完結するという段階になっております。

その意味で、本日のシンポジウムは5年間の総決算として、皆さんに私どもの考え方をご紹介し、かつ討論いただく場にするということです。この間、私どもは一貫して方法論の問題、ここに「新しいパラダイム」と書いてありますが、「パラダイム (paradigm)」とは日本人にはあまりなじみのない言葉ではありますが、学界ではしばしば用いられている言葉です。「方法論」と訳すことも可能ですが、「新しい視座」「新しいものの見方」という言い方をしてもいいでしょう。

私は約40年、中国研究をしてきました。この中国研究の世界に大変大きな問題があると感じておりました。実感として、同僚研究者にも問題を感じましたし、私自身にも大き

な問題を感じていました。今日の日中関係は決していいとは言えません。このような状況を招いている大きな責任も、中国研究者にあると思っています。

中国研究者は、ただ学問の世界で自分の好きな研究をしていればいいという時代ではありません。つまり、このように世界そのものが大きく激しく動くとき、日中関係もまたさまざまな分野で大きな影響を受けています。時代の影響を受けています。そのなかで研究者が果たすべき責務、果たすべき仕事があるという考え方に立ち、40年してきた中国研究には方法的に問題があるということです。5年間、格闘しつづけながら世界のいろいろな人々と対話を交わしてきました。アメリカはもちろんのこと、ヨーロッパの方々、東南アジアの方々、むろん中国の諸先生方とも真剣な対話を交わしてきました。私どもの力は限られています。この5年間、何かを成し得ることができたのかと考えると心許ない気持ちもしますが、螻蛄の斧を振る、あるいは大海に1つの石を投げると言いましょうか。

蠶螂の斧と言えども、ドンキホーテが風車に立ち向かう姿に、自分たちをなぞらえて何事か世界に訴えたいという気持ちから、このプログラムが始まっています。

狭い愛知大学という世界に限られた研究ではありません。私どもの視野は、愛知大学、東海地域という狭い世界、あるいは日本を超えて全世界に問題を訴えかけたいという思いです。大げさに言えば蠶螂の斧ですが、真剣にやってきました。

その総決算の場として今日を迎えたことを、私自身もいささかおもはゆい気持ちとうれしい気持ちの両方です。どうぞ今日と明日の2日間、ご清聴くださいませ忌憚のな

いご意見をお寄せいただければ幸いに思います。私からの話は以上にいたします。どうもありがとうございました。

●一司会 それでは、今回の国際シンポジウムの趣旨説明に入りたいと思います。なお、本日の司会は国際中国学研究センターの運営委員を務めております私、現代中国学部の山本一巳が務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

では、本学国際中国学研究センター副所長の高橋五郎現代中国学部教授より、本日のシンポジウムの趣旨を説明させていただきます。それではよろしくお願いいたします。

趣旨説明

高橋五郎

〈愛知大学国際中国学研究センター副所長〉

皆さま方、おはようございます。ただいまご紹介いただきました愛知大学国際中国学研究センター（以下「ICCS」と略す）の副所長をしております、現代中国学部の高橋と申します。

ただいま加々美所長からも話がありましたが、ICCSは文部科学省の「21世紀COEプログラム」に採択された2002年の秋に開催したICCS全体のシンポジウムから数えて、今回の全体シンポジウムは6回目となります。過去5回のシンポジウムと比べ、今回の異なる点は、「21世紀COEプログラム」と

いう、言うならば私どもの肩にのし掛かっていた重荷がすっかり抜けた気分になっている点です。引退したスポーツ選手もこのような気分ではなかろうかという思いがします。

発足以来ICCSが掲げてきた目標を達成するには、まだ道半ばで、はるか彼方の砂漠越えに等しい困難が続いているというところが正直な実感です。現在、ICCSは加々美所長を中心に、十数名の運営委員が毎月2回の運営委員会で活動方針を決めながら、研究活動と大学院生等の若手育成事業をおこなっています。運営委員の結束も固く、分解すること